教職ポーターリオに見る家庭科履修者の特徴

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>青木 幸子</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東京家政大学研究紀要 人文社会科学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>103-108</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2014-03</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>東京家政大学</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00009336/">http://id.nii.ac.jp/1653/00009336/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
教職eポートフォリオに見る家庭科履修者の特徴

青木 幸子
（平成25年12月12日受理）

Characteristics of Home Economics Students in Teacher-Training Courses that include an E-portfolio for the Teaching Profession

Aoki, Sachiko
(Accepted for publication 12 December 2013)

キーワード：家庭科、教職eポートフォリオ、履修カルテ、学習意欲、就業意志
Key words: home economics, e-portfolio for teaching profession, personal subject records, motivation, volition to be a teacher

1. はじめに
グローバル化の進展が著しい現代社会において、人材の育成は最重要課題であり、教育をめぐる改革のスピードが増している。2006（平成18年）に、中央教育審議会は「今後の教育のあり方について」を策定し、教職に関する専門科目として「教職実践演習」の導入を提案した。この科目は、教育実習を終えた最終学年の後期に開設することとし、教員に必要とされる最低限度の基本的な資質能力を修得させることを目的としている。そのため、「教職実践演習」の履修にあたりその前提条件として、それまでの学修を記録する「履修カルテ」の作成が必要のさられた。

そこで、本学では幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各教諭・栄養教諭など多様な教職に携わる教職員養成を担い、しかも教職課程履修者が多いことに鑑み、教員養成教育推進室を中心に検討を進め、幼稚園教諭を除く教職課程履修者を対象に「履修カルテ」として「教職eポートフォリオ」を導入することにした。

システム構築から運用3年を迎えた2012（平成24）年度、教職eポートフォリオの導入時期においての教育効果と課題について把握することを目的に、学生を対象ととした第1回調査を実施した。さらに、教職eポートフォリオの「教員コメント」を入力した教員を対象とした教員調査も実施した。両調査の結果を、本学博物館記要および研究報告書にまとめることで、教職eポートフォリオの効果とともに、システムと運用方法、学修活動の活性化に向けた教育内容や方法、学習環境の改善などの課題を把握することが可能であり、教員養成の使命と責任を再確認する契機となった。

同時に、調査結果より明らかになった一つの特徴は、学科・専攻により教職eポートフォリオの取り組みや効果に差が見られたことである。そこで免許状ごとの特徴を把握し、学生の実態に合ったより適切な改善策を講じることでポートフォリオの効果を高めることができるのではないかと考えた。本稿では、授業改善や学生指導など具体的な教職課程運営に活かすための知見を得るため、筆者の専門を考慮して家庭科履修者の特徴を把握することを目的とする。

2. 研究方法
（1）対象
本学3年生の教職課程履修者415名（内、家庭科免許状取得希望者79名）

（2）調査時期
2012年6月

（3）調査方法
集合調査：調査配票数415、有効票412、有効回収率99.3%

（4）分析方法
①調査項目に関する家庭科履修者の結果について単純集計を行い、教職に関する意識と教職eポートフォリオへの取り組み状態を把握する。また、全体集計の結果と比較する。
②さらに、教職への就業意志との関係についてクロス集計を行い、家庭科履修者の特徴を明確にする。
③それらの分析を踏まえ、大学としての履修の果たす教職eポートフォリオの可能性について検討する。
④統計解析にはSPSS（ver.19）を用いた。
3. 結果及び考察

（1）家庭科履修者の教職に関する意識の特徴

1）教員免許状取得希望理由とその時期

教員免許状の取得理由について複数回答の結果を図1に示した。家庭科履修者は、「①将来的に選択肢を増やすため」に「資格取得」を目指している学生が60%以上と多く、その他の理由として「⑤家族に勧められたから」32.9%、「⑦教職に魅力を感じたから」27.8%、「⑧やりがいのある職業だから」25.3%が続く。後者の理由は見られるように家庭科履修者の約四分の一、教職に積極的な意義を見出している学年である。一方、全学集計の結果は、「教職に魅力を感じたから」50.5%、「やりがいのある職業だから」31.8%が示す通り、教職に積極的な意義を見出している学生は、家庭科履修者よりいずれも高い割合を示し、異なる傾向を見せている。

図1 教員免許状取得希望理由(MA)

次に教員免許状の取得を希望するよう間隔についての結果を図2に示した。家庭科履修者の取得希望時期は「大学入学後」50.6%、「高校在学時」39.2%で合わせて約90%を占める。全体集計の結果では順位が逆転し、「高校在学時」47.1%、「大学入学後」34.5%である。「中学校入学時」および「中学校在学中」と教職免許状の取得を希望していた学生は、家庭科履修者で10.1%、全体では18.5%であり、両者の傾向は異なる。

図2 教員免許状の取得希望時期

2）教職への就業意志

図3に示すとおり、家庭科履修者の教職への就業意志は単纯集計の結果に比べると低く、「迷っている」「就かない」の割合が75.9%と高いため、すなわち、「必ず就きたい」「できれば就きたい」割合は合わせて24.0%であり、免許状取得理由の約四分の一に近い数値である。全体集計の傾向も40.0%の学生に就業意志が認められ、免許状取得理由と同様の傾向が確認できる。家庭科履修者の教職への就業意志は単純集計の結果より16.0ポイントも少ない。

図3 教職への就業意志

3）教員免許状取得希望時期と就業意志

教員免許状取得希望時期と就業意志との関係についてクロス集計を行った結果を図4に示した。「中学校入学前」から教員免許状の取得を希望していた学生は、「必ず就きたい」「できれば就きたい」が50%ずつを占め、100%教職への就業意志があることが分かる。「中学校在学中」の希望者は「必ず就きたい」66.7%、「迷っている」33.3%で、三分の二の学生は意志が明確である。一方、「中学校在学中」の希望者は、「必ず就きたい」「できれば就きたい」を合わせて19.3%、「大学入学後」の同様の希望者は17.5%であり、就業希望者は約五分の一に激減する。教員免許状の取得希望時期が早いほど、教職への就業意志が強いことが明らかになった。

図4 教員免許状取得希望時期と就業意志(n=79)

（2）家庭科履修者の教職eポートフォリオに関する実態

教職eポートフォリオの作成に関する調査項目について、「そう思う」「どちらかというとそう思う」を肯定的評価、「どちらかというとそう思わない」「そう思わない」を否定的評価と分類して分析した。
教職eポートフォリオに見る家庭科履修者の特徴

1）教職eポートフォリオへの理解
さまざまな動機や意志を持った家庭科履修者の教職eポートフォリオの理解度を図5に示した。教職eポートフォリオの目的や内容について理解している学生は約70%であるが、「教職実践演習」の関係者や教員に必要とされる基本的な能力について理解している学生は50%以下と低く、教職eポートフォリオへの理解を周知徹底する必要があるとされた。

図5 教職eポートフォリオの理解度(n=79)

2）教職eポートフォリオへの取り組み姿勢
教職eポートフォリオへの取り組み姿勢を図6に示した。「1eポートフォリオの目的と理解し、取り組むことができている」55.7%、その際に「①教員からのコメントやアドバイスを参考にしている」学生は46.9%、「②学習目標を設定し、学修に役立っている」学生は44.3%、「③作業を進めていく」学生は35.7%、「④教員・学習の関係が明確になった」32.4%、「⑤授業の評価が改善される」23.3%、7.6%など教職eポートフォリオの活用に関する内容については否定的な評価が目立つ。

3）教職eポートフォリオの有効性と達成状況
教職eポートフォリオを成績することによる有効性・達成状況を図7に示した。有効性・達成感と半数以上の学生が肯定的に評価しているのは、「①学修状況を振り返ることができている」81.0%を筆頭に、「②学修目標を立てることができている」77.2%、「③成績評価を気にするようになった」60.8%、「④通路について考えることができる」54.4%の4項目であり、着実に資質力量を形成していけるためのプロセスにおいて高い評価をしており、履修カルテの目的を果たしつつあるように思わせる。しかしながら、教職課程履修の初期の学修であることから、具体的な資質力量形成の成果確認に努めると、学習意欲や成績の向上に結び付いていないという課題も明らかになった。

それぞれの項目とも相関関係を把握するため変数相関分析を行った結果、相互に1%水準で有意差が認められた。特に強い相関が認められたのは、「①学修状況の振り返り」と「②学修目標の設定」「③作業の設定」「④将来的な通路」「⑤学習意欲の向上」、「⑥成績評価への関心」と「⑦成績の向上」、「①学修状況の振り返り」と「②学修目標の設定」、「③作業の設定」、「④将来的な通路」、「⑤学習意欲の向上」と「⑥成績評価への関心」である。

以上のことから、教職eポートフォリオの有効性や達成状況の割合を高めていくことが相対的に教員としての力量形成につながっていくことが期待される。
4）教員に求められる資質能力の獲得程度

文部科学省の指標を参考とした教員に求められる能力について、2年間の学修結果を図8に示した。半数以上の学生が「得しており」と肯定的に評価したのは、「③者と協力する力」81.0%、「④コミュニケーション力」76.0%、「②子どもについての理解力」63.3%、「①学校教育についての理解力」58.3%、「⑤教科・教育課程に関する基礎知識・技能」57.0%の5項目である。否定の評価は、「④教育実践力」17.8%、「⑦課題探索力」26.8%の2項目である。

図8 教員に求められる資質能力の獲得程度 (n=79)

このような能力指標の評価には、学科・専攻のカリキュラムのほか、部活動・サークル活動・ボランティア活動など大学生活全体を通した活動体験も関係している。

これら7つの指標の相関関係についても変数間相関行列を行った結果、「③者と協力する力」「⑤教育実践力」を除いた他の項目間に1％水準で有意差が見られた。なかでも、「③者と協力する力」「④コミュニケーション力」「⑦課題探索力」には強い相関が認められた。

（3）家族関係者の就業意志と関連の強い項目

教職への就業意志と教職経験者の取り組み姿勢との関係においては、「①教職経験者の目的的理解」、「取り組むことができる」について明確な差異が見られた。（図9）就業意志のある学生は80％以上が目的理解して取り組んでいるのに対して、迷っている学生やまったく就業意志のない学生は50％未満であった。

図9 就業意志と教職経験者の取り組み (n=79)

ただし、カリ2乗検定の結果は有意ではなかった。

また、就業意志と有効性・達成状況との関係においては、就業意志の明確な学生ほど「①成績評価を気にするようになった」ことが分かる。（図10）カリ2乗検定の結果、5％水準で有意であった。（χ²=17.362, p=0.043）

図10 就業意志と教職経験者の有効性・達成状況 (n=79)

さらに、就業意志と能力獲得程度の関係を分析すると、就業意志が明確な学生ほど「⑤教科・教育課程に関する基礎知識・技能」（⑤χ²=20.459, p=0.015）、「⑥教育実践力」（⑥χ²=22.150, p=0.008）の獲得が高いことが分かった。（図11）特に、家庭関係者の全体で獲得割合が低かった「④教育実践力」において差が見られたことは、就業意志の強い学生は日常の学修をもととなり、部活動・サークル活動やティーチング・アシスタンス（T.A.）などとして教育現場との関わりを有意的に持つなど、教員としての資質能力形成に効果していることが示唆される結果となった。意図的な行動を伴わない学生は、就業意志が強くても、それらの能力の獲得程度は低い。

図11 就業意志と能力獲得程度 (n=79)

既に述べたように、就業意志と能力獲得程度の関係を分析すると、就業意志が明確な学生ほど「⑤教科・教育課程に関する基礎知識・技能」（⑤χ²=20.459, p=0.015）、「⑥教育実践力」（⑥χ²=22.150, p=0.008）の獲得が高いことが分かった。（図12）特に、家庭関係者の全体で獲得割合が低かった「④教育実践力」において差が見られたことは、就業意志の強い学生は日常の学修をもととなり、部活動・サークル活動やティーチング・アシスタンス（T.A.）などとして教育現場との関わりを有意的に持つなど、教員としての資質能力形成に効果していることが示唆される結果となった。意図的な行動を伴わない学生は、就業意志が強くても、それらの能力の獲得程度は低い。

図12 就業意志と能力獲得程度 (n=79)

（106）
（4）大学の質保証と教職eポートフォリオの可能性

以下のように教職eポートフォリオの導入初期段階の家庭科施設者実態から、教職への就業意志が強い学生ほど教職eポートフォリオを有効に活用し、自身の資質効率形成に役立て、効果を実感している姿が明らかになった。しかし、その他四つの三を占める教職への就業意志が定かではない学生やまったく就業意志がない学生にとって、教職eポートフォリオはどのような意味を持っているのでしょうか。

就業意志のない学生の結果から大学の質保証の一環として教職eポートフォリオの活用について考えてみましょう。

教職eポートフォリオについては、教職課程オリエンテーションで目的や内容の概要について説明し、その具体的作成に当たって説明会を開催している。そこで、教職eポートフォリオ・ガイドブック」を配置し、パワーポイントを活用しながら入力方法を示しながら理解を図っている。さらに、アドバイザーを配置するなどにより支援体制を整えていく。このような個別セッションにて、学生は教職eポートフォリオの作成に着手していく。

教職への教職を望まない学生のうち半数以上の学生が教職eポートフォリオを効果ありと評価したのは、「①教職状況の振り返り」78.3%、「②教職目標の設定」75.0%、「③成績評価への関心」63.9%、「④将来の進路」55.0%の4項目であった。これらの結果から、教職意志に関わらず学生は大学での学びについて主体性を発揮しており、専門的な知識・技能の習得に向けた自覚的な取り組みを始めているという。そのことが、「④将来の進路」を考えることにつながり、学修の質を高め、それが学修の成果へと還元され、さらなる学修目標の設定へと循環していく取り組みとして定着していくことを期待したい。

すでに「教職eポートフォリオの効力・達成状況」において、「学習意欲」が「将来の進路」や「学修目標の設定」、「資質形成」、「成績評価への関心」と強い相関があることを指摘し、学習意欲の向上を引き出す意図的な働きかかが特に必要である。

学生がその資質と能力を全く的に開花し、将来設計への指標となるべき資格を取得し、キャリア形成を促進できるに足る基盤的な知識・技能を保証する学びを我々は提供しなければならない。そのためにも、学生生活全体を通した教育活動が重要な意味を持つ。少なくとも学生が大学で学ぶことの意味と学修への姿勢を問い直すことは、すべての学生に共通するeポートフォリオの効果として確認できるのではないかだろう。『履修カタログ』による学修内容の蓄積は、自らを誇り、将来を模擬するための契機として有意義な取り組みであると考える。

学びとは、「世界づくり」、「仲間づくり」、「自分づくり」の三位一体による「意味」と関係の編み直しの繰り返してある。佐藤学は定義していると、授業の内容だけで学びの目標が達成されるわけではない。さまざまな方法で、誰と学び合うかによっても、「意味と関係の編み直し」はその範囲をレベルを越える、教員側のものを肝に命じて学び甲斐のある授業を展開していく責務がある。

4．要約

導入初期段階の教職eポートフォリオの作成を通じて、家庭科施設者教職への就業意志による特徴について分析し、次のような見解を得た。

①家庭科施設者四分の一は、教職に積極的な意思を見出している学生である。
②教職eポートフォリオの作成、「学修状況の振り返り」と「学修目標の設定」について約80%、「将来の進路」や「成績評価への関心」について50%以上の学生が効果ありと肯定的に評価している。
③これらの特徴を教職への就業意志で比較すると、意志が明確な学生ほど、「教職としての資質形成」において有意な特徴を示す。同時に「学習意欲の向上」「成績評価の向上」において肯定的に評価している。
④教員に求められる能力の獲得程度も、教職への就業意志が明確な学生ほど、「学校教育についての理解力」「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」「教育実践力」「課題探求力」において肯定的に評価している。
⑤教職eポートフォリオは、教職への就業意志の強い学生にはその効果が顕著である。一方、就業意志のない学生にとっても上記③の結果に見られるとおり、教職eポートフォリオの作成は、「学修状況の振り返り」および「学修目標の設定」等に一定の役割を果たしていることが確認された。
⑥教職eポートフォリオは、学生自身による主体的な取り組みを推奨することで、大学生活全体の質的に向上を図る役割が期待される。

解放制の教員養成制度において、必ずしも教員をめざす学生だけが教職課程を履修しているわけではない。そのための課題も指摘されている。しかし、解放制の本来的な意味は、多様な資質能力を備えた教員を養成することを目的したものであり、画一的でない個性豊かな教員の養成にある。教職eポートフォリオは教職をめざす学生はもちろん、めざさない学生にも共通の効果が確認された。それは学修活動の質的充実を促す可能性である。その可能性を高めるためにも、教員にとって授業のデザイン・展開・評価についての多角的な分析は必要である。教員養成や教師教育において授業実践の検証や研究が重要となるようになってきたのは、そこに指導者の資質と能力に関わる要因

（107）
Abstract

This study analyzed the characteristics of the students who took a Home Economics Course concerning the effects and issues arisen from making out e-portfolio for teaching profession. And also I have examined the meaning of personal subject records in learning. The results are as follows:

1. A quarter of the students who took a Home Economics Course found it to have a positive effect on their teaching.

2. About eighty percent of the students who created an e-portfolio said the experience had a positive effect, particularly in terms of looking back on learning and setting learning aims. More than fifty percent of the students evaluate the project positively with regard to “their future after leaving university” and “the interest in the assessment of school record.”

3. Students who had a strong desire to enter the teaching profession benefitted more from the creation of an e-portfolio than other students did.

4. However those students who don’t desire to enter the teaching profession, found that making of an e-portfolio for the teaching profession helped to heighten the quality of learning because they came to concern themselves positively with learning.

参考文献

1）青木幸子・二川正浩・渡部晃正・走井洋一・相良麻里・中島紳子：ICTを活用した教員養成教育に関する研究－教職eポートフォリオに関する第一次調査の結果より－, 東京家政大学博物館紀要, 18(東京), 2013, pp.39-55

2）佐藤学：「学び」から逃走する子どもたち 岩波ブックレット524, 岩波書店(東京), 2002, pp.56-57

3）秋田喜代美編：授業研究と談話分析, 放送大学教育振興会(東京), 2013